この方法は，青山学院大の間野教授の発案されたものである……とうかがっている。

（EX）つぎのプログラムを実行したとき，それぞれの変数に格納される数値を下表に記入せよ。

```
      A=3・3
      B=7・7
      X=A+B
      WRITE (6, 15) A, B, X
15    FŌRMAT (3F6・2)
      STŌP
      END
```

A	B	X

このとき，結果はどのように印刷されるか下欄に記入せよ。

トレース（実行の状態を，学習者がコンピュータに代って自らを制御しながら数値変化の過程を追っていくこと）は，それぞれの「文」の機能をいつしか再確認しているという学習効果を持っている。

（EX）つぎの文をトレースせよ。

```
10    READ (5, 20) X
20    FŌRMAT (F5・1)
      IF (X・EQ・O・O) GŌ TŌ 40
      Y=X＊＊2
      WRITE (6, 30) X, Y
30    FŌRMAT (2F10・2)
      GŌ TŌ 10
40    STŌP
      END
```

```
DATA    2・2
        3・3
        4・4
        0・0
```

	X	Y	結　果　の　印　刷
1回目			
2回目			
3回目			
4回目			

（EX）つぎの場合をトレースせよ。

X＝4・4
Y＝8・8
W＝X
X＝Y
Y＝W

X	Y	W

（5ステップのものを1ステップ毎に記入させてみるよって次のようになればよい）

X	Y	W
4・4	?	?
4・4	8・8	?
4・4	8・8	4・4
8・8	8・8	4・4
8・8	4・4	4・4

（その4）　流れ図になじませること

(1) AとBの大きさを比べて，大きい方をAに，小さい方をBに入れる。

(2) A　が5ならば　A＋Bを
　　A　が8ならば　A／Bを
　　Aがこれ以外のときは0をXに入れる。

(3) Aに1づつ加えて行き，Aが 100以上になったら計算を終る。

(4) 1＋2＋3＋……＋ 100 を計算して Nにしまう。

など類題を多くして，ひとつのパターン（ある種の問題をとく定型のようなもの）を体得させるのがねらいである。

そして，ときにはつぎのような問題を検討させるのも面白い。

つぎのプログラムを流れ図になおせ。

```
      A=O. O
11    READ (5, 12) X
12    FŌRMAT (F5・1)
      IF (X・EQ・O・O) GŌ TŌ 20
      A=A+X
      GŌ TŌ 11
20    WRITE (6, 22) A
22    FŌRMAT (F10・2)
      STŌP
      END
```

各校では，より以上のアイデア，熱意などによりもっと上手な壁やぶり法をおもちのことと思う。

各校での成功例がありましたら御教示ください。

まとめて，「情研だより」により皆様にお知らせしたいのです。御協力お待ちしています。